

令和4年度 学校自己評価表

鳥取県立倉吉農業高等学校

中長期目標 (学校ビジョン)	農業教育をはじめとして、あらゆる教育の場において豊かな感性を育て、基礎基本を大切に知の修得に努め、自らの可能性を信じて不断の努力を惜しまない生徒の育成を図るとともに、地域社会に貢献できる人材の育成を目指します。
---------------------------	---

今年度の 重点目標	<ol style="list-style-type: none"> 1 基礎・基本の定着と学力の向上 2 基本的な生活習慣の確立 3 地域連携と特色ある教育活動 4 進路意識の向上と進路保障 5 コミュニケーション能力の向上
----------------------	--

年度当初					評価結果(中間)			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	今年度の目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	目標達成のための改善方策	
1	基礎・基本の定着と学力の向上	基礎学力の定着	前年度基礎力診断テスト結果 ・1年間の学習の取組でD3は減少、特に2年生が大幅に減少している。 ※D3:筆記試験を課す企業で不合格が多い。 ・2年生上位層は大学一般入試で合格が目指せるB3以上2名。(4月から変化なし) ・B3生徒のうちB2以上の学力をつけ、中位層から上位層へ向上した生徒が数名いる。	・基礎力診断テスト結果におけるD3の割合が、1年生は、4月数値から10%減少、2年生は、4月数値から20%減少している。	・ One week 問題集や朝学習の時間を活用して基礎学力の定着を図る。 ・ 朝学習・基礎学力テストの内容を検証し、実施方法等の改善に努める。 ・ 診断結果を用いた分析を国語、数学、英語各教科会で実施する。	基礎力診断テスト結果(4月回→8月回) ・ 1, 2年生D3変化 1年生: 1人増(4月48%→8月53%) 2年生: 1人増(4月39%→8月42%) 課題の取り組みが不十分であった。 ・ 2年生B3変化 3人増(4月0人→8月3人) 担任面談や進路LHRなどを通じて進路意識の向上がみられ、学業に対する意欲が高まっている。	D	・国語、数学、英語各教科で科会を開催し、診断結果を分析して通常授業での取組やテスト準備課題の取組方法を見直す。 ・進路意識の高まりが学力向上に効果的に作用することを踏まえ、面談、進路LHR、進路ガイダンス、課外活動などの教育活動を引き続き充実させる。
		授業改革の取組の推進	・各教科・科目で公開授業が実施され、協同学習の授業実践・授業研究は進んでいる。協同学習の手法による授業改革が徐々に実践されつつある。 ・ICTの全体の研修会を2回実施した。また、週1回、希望者を対象にした研修会を行い、グーグルアプリを活用できる教員が増えた。 ・R4年度入学生の教科の新しい3つの観点別評価について、昨年度までに本校の評価基準等を協議し、方向性を出した。	・全ての教科・科目で協同学習の理論を取入れた分かりやすい授業を実践している。 ・生徒が積極的にICTを活用し、生徒の学習意欲と学力が向上する。 ・各教科ごとの評価表をもとに観点別評価を行い、生徒の学力向上につなげる。	・協同学習をテーマとした公開授業を全員が行うために研修会を実施する。 ・誰もがICTを活用した授業を実践するために、ICT研修を学期に1回実施し指導力の向上をはかる。1年生のChromebook授業活用が積極的に行われるようにICT活用推進委員会で計画し実践する。 ・教科間の連携を強化し、より良い評価方法を模索していく。	・協同学習をテーマとした研修会を実施していないが、個別に校外の研修に積極的に参加した。 ・ICT研修を学期に1回ずつ計2回実施し、指導力の向上をはかっている。 ・ICT活用推進委員会を6月に実施し、ICT活用のルールや研修会について協議した。 ・授業評価アンケートや学習時間調査をGoogleフォームを利用して集計等を行い、業務時間削減に努めた。 ・観点別評価の評価方法については、特に大きな問題は聞いていない。	C	・協同学習をテーマとした研修会を実施し、公開授業につなげるようにする。 ・ICT研修を今後も計画的に実施する。 1年生のChromebook授業活用については、アンケート等を実施し、使用頻度を把握する。 ・1年生の観点別評価の評価方法について、各教科での問題点・改良点について教育課程検討委員会等で協議し、よりよい評価方法を完成させる。
2	基本的な生活習慣の確立	挨拶指導の徹底と服装規定を守る取組の推進	・分離礼がかなり浸透してきた。 ・8割強の生徒が服装規定を守っている。2割の生徒は毎月の服装検査後に改善できている。	・全員が常に分離礼による挨拶ができる。 ・常に服装規定を守り、安定感のある生活態度で過ごしている。服装改善の保護者への文書を10%にする。	・授業、清掃、農場当番、部活動等あらゆる場面で分離礼を徹底する。 ・毎月の服装検査の実施と事後指導を徹底し、担任、学年団、学科、生徒指導部の連携を密にし、段階的・組織的指導を行う。	・自発的にあいさつをする生徒が増加した。 ・分離礼は浸透してきた。 ・4月から9月6回の服装検査で16.6%の生徒へ服装改善の文書を出した。昨年の12.5%を4.1ポイント上回った。	C	・あらゆる場面での、あいさつ、分離礼の徹底をする。 ・情報を共有し、学年団、学科、分掌の連携を深めた指導を行い、生徒の自律心の向上を図る。 ・服装検査基準の徹底と日常的な声掛けを、全職員で行う。
		寮教育の充実	・日課に自習時間を設けているが、目に見えた成績の向上に実感が持てず、学習に対して自信を持っていない生徒がいる。 ・年間3回寮講演会をもち、コミュニケーション力の向上、農業及び関係業種への進路実現、救急救命法について学んでいる。 ・寮生サミットでは、他府県の農業経営者育成高校の寮生同士が、各校の紹介ならびに寮の現状と課題を話し合い交流を図っている。令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大のため中止、令和3年度はリモート開催となり、十分な成果が上がっていない。	・基礎学力テストの成績が毎回65点以上になることをきっかけに、日頃の学習や進路実現に意欲的に取り組んでいる。 ・講演会後のアンケートで、内容の理解および満足度を3以上(5段階評価)と感じている生徒が60%いる。 ・他校を訪問し、対面での交流および寮見学を再開する。	・基礎学力テストの範囲に合わせた課題に繰り返し取り組みさせる。得点が伸び悩む生徒に対しては、課題プリントを追加し指導ならびに助言を加える。 ・講演の中に協同学習の要素を取り入れたり、体験することで理解が深まるよう、講師に依頼する。 ・新型コロナウイルス感染状況に応じた実施方法を、関係各校と協議する。	・1学期基礎学力テストの平均点は、1年生80点、2年生50点、3年生70点で学年に差が出た。 ・6月に臨床心理士による「ストレスのかかり方」について講演いただいた。各自が持っているストレスを分析し、その対処法を学んだ。講演後のアンケートによると97%の生徒が講演内容に満足している。本年度は教育実習生3人による特別講演会も開催した。 ・寮生サミットは京都府立農芸高等学校で開催された。本校は直前まで参加を予定していたが、コロナウイルス感染状況から昨年同様リモートでの参加となった。	B	・得点が伸び悩む2年生に対し、個別に課題プリントを与え反復学習させる。 ・11月にAEDを使った救急救命講習会、1月に卒業生による講演会を計画している。
		人生を考える	・人権学習を通じて知り得たことを自分のこととして考え、発言する生徒が少ないように見受けられる。 ・人権学習LHRでの話し合いを通じて自分の考えを互いに伝えあっているが、まだ改善の余地がある。	・自分は社会の一員であって、その社会をより良いものにしていくことで、自分の人生も充実させることができることを認識し、自覚する。 ・互いに自分の考えを伝えあい、認めあうことで、コミュニケーションの大切さを学び、より良い社会をつくるのに必要な基本的な態度を身につける。	・「人生を考える講演会」や「性に関する講演会」などを企画することで、人権問題を通して社会と自分との関わりについて一人ひとりが考え、感想を述べる機会を提供する。 ・人権LHRにおいては身近で自分事として考えられるテーマを設定し、クローズドブックを活用するなどして、自分の意見を互いに伝えあうことができるよう授業の展開を工夫する。	・「性に関する講演会」や人権教育講演会、生命と人生の大切さを通して、社会行動の重要性について、感想を述べることでできた生徒が多かった。 ・人権教育LHRでは、1年生はジャムボードで個々の意見をリアルタイムで伝えあうことが出来たクラスがある一方で、2・3年生は講演や講義形式だったため、意見を伝えあうことが難しかった。	C	・人権教育LHRでは、1年生は全員クローズドブックを使い、ジャムボードで個々の意見をリアルタイムで伝えるような工夫を更に徹底させる。2・3年生は、事前のアンケートをQRコードを用いて実施するなどし、個々の意見が確実に授業に反映するように工夫する。 ・上記の工夫と並行しながら、班活動など、生徒が互いに意見を伝えあう工夫を、教育活動に取り入れる。

年度当初				評価結果(中間)			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	今年度の目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	目標達成のための改善方策
	教育相談・特別支援教育担当を中心とした組織的取組の推進	<ul style="list-style-type: none"> 自己理解・他者理解の意識が進んでいない生徒は、友人との関係の持ち方に困惑しやすい傾向がある。 QUの結果において、非承認群・不満足群・要支援群に分類される領域に学校生活に対する意欲の低い生徒が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自己理解・他者理解が進み、より良い人間関係作りができるようになり、生徒アンケートの「私のクラスは自分にとって過ごしやすい場所である。」の割合が7月に比べ12月が上昇している。 QUの結果において、生徒の学校生活意欲平均得点が第1回目検査より第2回目検査が向上している。 	<ul style="list-style-type: none"> 新入生全員面談と2・3年生の面談、職員による生徒観察をとおして、生徒の実態把握をし、より実態に即した学習支援・生活支援をする。 校内職員研修会を実施し、QU等を活用した教師の生徒対応のスキルをアップさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 1年生全員面談を実施し、入学後の様子を観察したり、学校生活に対する意欲や要望を把握した。また、教育相談担当や教育相談員との生徒面談は定期的にコンサルテーションなど外部機関の助言も受けながら必要に応じて随時実施している。 第1回目のQUを6月に実施し、8月下旬に第1回QUの結果の職員研修を外部専門機関の方にも参加していただき行い、生徒の状況から今後の生徒理解へ繋げた。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 学校生活に対する意欲や要望を把握するため、教育相談担当、教育相談員、担任と連携を図り、情報を共有しながら必要な生徒の面談を継続する。 研修内容を活かして全職員が生徒支援を進めていく。 QUの結果を受けて職員研修を行い生徒対応のスキルアップの継続を図る。 第2回QUを10月に実施する。
	各教科の魅力づくり	<ul style="list-style-type: none"> 生物科はコロナ禍においても感染対策を取りながら可能な限り乗馬交流を実施した。また、地域への普及を目指す青パパイプロジェクトは本校産苗の供給により県内生産者数の増加が見られた。 食品科はお米甲子園における7年連続の入賞やスマート農業の実践、のうこう市場や北谷販売など地域に認知されている取組を続けている。 環境科はJR倉吉駅的环境整備や草花交流など地域貢献につながる取組を継続している。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域に定着した取組を継続しながらも時代のニーズにマッチングした特色ある取組やSDGsの理念に基づいた学習活動を実践している。 調査・分析を中心として、より科学性を高め、地域農業への貢献を視野に入れたプロジェクトに取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 各教科の特性に基づいた課題研究を推進し特色ある取組を地域振興につなげる。 地域貢献に加えて環境問題などグローバルな視点を持った課題研究を実践する。 SDGsに関する生徒及び教職員の知識と理解を推進するために研修会をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> 生物科は学科の魅力事業として、可能な限りの乗馬交流、全国和牛能力共進会に伴う和牛の育成と梨のジョイント栽培における農業大学校との連携、ならびに青パパイプロジェクトの地域農家との連携などを進めている。 食品科は今年度より新たに製パン実習を取り入れ、各種イベントへの出品を始めた。また、良食味米生産やのうこう市場の運営も順調に実施できている。 環境科はJR倉吉駅的环境整備による地域貢献事業を継続している。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 科学的裏付けをしながらプロジェクトを進めていくために関係機関との連携に一層取り組む。 特色ある取組をマスコミや地域へ情報提供・発信することにより、生徒の自己肯定感や達成感をより一層高めていく。 教職員、生徒ともにSDGsを意識した取組を身近なところから進めていく。 プロジェクト研究集録を作成する。
	地域連携と特色ある教育活動	<ul style="list-style-type: none"> 食品科はのうこう市場の販売実習だけでなく、米の食味鑑定会での入賞、スマート農業の実践が特色ある取組として認知度も高い。環境科はJR倉吉駅周辺の草花装飾だけでなく、小学校等との草花交流が特色ある取組として継続している。 これらの取組は新聞やテレビなど多くのマスメディアに取り上げられ、本校の魅力を十分に発信できた。 中学生一日体験入学は、一年ぶりに開催した。日程を1日にしたこともあり参加中学生は74名であった。 	<ul style="list-style-type: none"> 積極的に地域と連携し、その取組が地域のニーズに応えるものであるとともに、生徒の学びが深まり自己肯定感や進路意識の醸成につながっている。 教育活動を積極的に本校公式SNSで発信するとともに、一般に対しては報道機関に資料提供することで地域に本校の理解が進んでいる。 中学生一日体験入学の開催を2日間に戻し、県内外からの参加者が150名を超え、3つの学科の主な学習内容を体験することにより、中学生、保護者、中学校教員の本校理解が進んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 科学的裏付けのあるプロジェクトを進めていくために、関係機関(大学、農業大学校、農業試験場、産業技術センターなど)との連携を一層進める。 ホームページの投稿の仕方、報道機関への資料提供の方法について周知する。 中学生一日体験入学の参加者を増やすために、日程が他校と重ならないようにするとともに、各学科の魅力ある取組をSNS等を利用して県内外に発信し、中学生および保護者の興味・関心を引きつける。 	<ul style="list-style-type: none"> 3学科ともコロナ感染症対策を実施しながら昨年に引き続き地域連携事業を進めている。特に生物科は青パパイの栽培・普及、食品科はのうこう市場、環境科はJR倉吉駅周辺の環境整備などが地域に認知され、その都度マスコミを通じた情報発信も積極的に行っている。 今年より新たに秋の交通安全運動期間に倉吉警察署との連携事業として生産物の配布を行い、本校生産物のPRにも繋げた。 中学生一日体験入学は、2日間開催したが、参加中学生は2日間併せて85人でありそれほどの増加は無かった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> コロナ感染症対策を実施しながら引き続き、地域や中学生のニーズに合った地域連携事業を進める。 10月19日に倉吉市立西中学校の農業体験学習を本校において実施する。 10月28日に開催される日本女性会議2022 in 鳥取くらしに事例発表と生産物販売に参加する。 学園祭、のうこう市場、北谷販売など可能な限り本校の生産物を地域へアピールしていく。
3	資格取得の推進	<ul style="list-style-type: none"> FFJ級位検定の合格者は、初級位62名(合格率53%)、中級位23名(同26%)で昨年実績を上回った。 各種資格検定の合格者数延人数は278名で、昨年の263名を上回った。 最難関であるアグリマイスタープラチナの認定者が2名あった。 	<ul style="list-style-type: none"> FFJ検定合格率が初級60%以上、中級40%以上、上級位検定合格者数は25名以上、合格率85%以上である。 各種資格検定の合格者数が延300名以上である。 アグリマイスタープラチナ認定者、農業技術検定2級、測量士補などの難易度の高い資格取得者が昨年以上である。 	<ul style="list-style-type: none"> FFJ検定の意義や学習方法等の説明をとおして生徒のモチベーションを高める努力を続け、普通科教員も含め教員が一丸となり指導する。 資格・検定の情報を積極的に案内することで受検者を増やし、資格取得の有利性を説明し主体的に学習させる。 農業技術検定問題集やテキストを活用して出題傾向を分析・把握し指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> 夏休み明けのFFJ検定1回目では初級合格者38名(昨年:39名)、合格率は30.8%(昨年34.8%)、中級合格者は10名(昨年:13名)、合格率は29.4%(昨年:38.2%)で本年度は中級位合格率の減少が見られた。また、初級位に関しても1年生は合格率31.5%(昨年:32.4%)に対し、2年生が15.6%(昨年:32.3%)と、2年生の合格率の低さが目立った。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 第2回FFJ級位検定(11月15日)の合格率を上げるため、1年生に対しては再度、級位検定の意義や学習方法、2年生の中級位受検者に対してはアグリマイスターの高得点に繋がることを強調して合格に対するモチベーションを高めさせる。上級位検定についてはすでに中級位合格している生徒に対する指導を各学科の担当を中心に早期に開始する。
	学校からの情報発信の推進とPTA活動の活性化	<ul style="list-style-type: none"> 青パパイやお米甲子園などの成果がマスコミに多数取り上げられ、生徒の達成感や自己肯定感につながっている。 各分掌へはホームページ(HP)への掲載を呼びかけているが、掲載方法が十分に伝わっているとは言い難い。 PTA活動への参加者は、各行事、研修会等への参加者数の推移から考えると一定数ある。 	<ul style="list-style-type: none"> 特色ある取組をマスコミへ情報提供、地域へ発信することによって、生徒の自己肯定感や達成感がより一層高まっている。 教育支援部を中心に、各分掌や各々がHPを積極的に更新し、行事の様子など本校の活動が広く認知されている。 保護者等が積極的にPTA行事に参加している。 	<ul style="list-style-type: none"> 特色ある取組をHPやSNSに投稿する。また、マスコミへ情報提供し地域へ積極的に発信する。 年間60回以上のHP掲載を目標に取組み、実習や部活動の様子を担当者や部顧問がHPにアップするよう働きかける。 保護者への情報伝達手段として「まちcomiメール」を活用する。 	<ul style="list-style-type: none"> 報道機関へ積極的に情報提供し取材依頼を行った。 学校行事や実習の様子など担当者、部顧問の協力を得てHPのアップが定期的に出てきている。 保護者への文書は生徒配付と、「まちcomiメール」で周知し、行事予定もHPに掲載し周知した。 PTA活動は感染状況悪化により、前期の活動は中止せざるを得なかった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き、報道機関へ積極的に情報提供し取材の依頼を行う。 HPの更新は基本的に、毎週1度以上行い、各行事の様子を、情報発信していく。 後期のPTA活動は感染対策をとりながら徐々に活動再開していく。
	教育活動に必要な人的・物的・地域資源の有効活用	<ul style="list-style-type: none"> 独自事業・その他事業に関する講師の報償費、特別旅費等を適正に執行し、教育活動を支援している。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校予算の適正かつ迅速な執行を行い、2学期末までに執行率60%以上とする。 	<ul style="list-style-type: none"> 各種事業等の計画段階から教職員と連携し、地域、保護者、関係機関等を教職員へつなげる役割を果たす。 地域の人材等の情報提供を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校予算の執行率は運営費62.3%、特別会計55%、独自事業40%である。概ね目標数値に達しているが、光熱水費等の高騰により予算が不足する恐れがある。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 今後の事業について、各担当と更に連携を深め計画的に執行していく。

年度当初				評価結果(中間)				
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	今年度の目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	目標達成のための改善方策	
4	進路意識の向上と進路保障	インターンシップの推進	・2年生インターンシップはコロナ禍のため2年連続で中止した。 ・スーパー農林水産業士育成カリキュラムとしての長期インターンシップは、万全の新型コロナ感染防止対策を取った上で、2・3年生延10名が畜産農家、園芸農家、森林組合等で実施した。	・9月に2年生インターンシップを実施し、就労意欲の向上や進路選択の大きな一助につながっている。 ・長期インターンシップに参加する生徒が10名を超え、より実践的な農業体験を経験することにより、農業後継者としての意識や態度が身に付いている。	・早期にインターンシップ委員会を開催し、地域の関連団体との連携も取りながら、生徒の進路希望に沿った体験先を開拓する。 ・長期インターンシップは鳥取県農林水産部と連携し計画していく。	・3年ぶりに2年生インターンシップを実施した一方でコロナ禍のためにできない企業もあった。 ・スーパー農林水産業士育成カリキュラムの長期インターンシップは9名の生徒が実施した。(残り1名は冬期休業中に実施予定) ・3年ぶりに県外先進地研修(畜産部門に3名、園芸部門に1名参加)が実施できた。	B	・1年生を聴衆にしたインターンシップ報告会を開催する。 ・今年のインターンシップを振り返り、来年度の実施に向け、新たなインターンシップ先の開拓や実施時期・方法について検討する。
		農業後継者の育成	・スーパー農林水産業士の5期生5名が認定され、2年生5名が来年度の認定を目指している。 ・スーパー農林水産業士認定者のうち、5年連続で鳥取大学、2年連続で公立鳥取環境大学へ進学した。 ・農業関連の進学・就職割合(42.2%、35名/83名)が微増した。(R2:38.6%、32名/83名)	・スーパー農業水産業士6期生が5名以上誕生し、鳥取県の農業を支える人材が育っている。 ・スーパー農林水産業士のしくみ、利点や、各学科の取組を今まで以上に県内外の中学校へ情報発信することで入学希望者数の充足率が上がる。	・スーパー農林水産業士育成プログラムに則ったカリキュラムを確実に実施し、就労意欲喚起に関わる行事に積極的に参加させる。 ・4年生大学への進学希望者の基礎学力を高める取組を継続し、特にプロジェクト研究に重点をおいて主体的に取り組ませる。	・スーパー農林水産業士育成プログラムを着実に実施し、現在の候補生徒は8名である。 ・認定プログラムのうち長期インターンシップについては、畜産農家に5名、野菜農家及び法人に3名受け入れていただいた。また食の6次産業化プロデューサー育成講座レベル1については9名の1年生が認定を受けた。 ・就労促進研修会は20名の参加があり、農業生産法人や大規模酪農家などの見学研修と農業大学校における農業者とのディスカッションが行われた。	B	・スーパー農林水産業士育成の認定希望者のうち、大学進学を目指す生徒については、食の6次産業化プロデューサー育成講座レベル2の認定をすすめる。 ・農業自営を目指す生徒を増やすために、農業の楽しさ、やりがいを感じさせる授業、実習を一層実践し、特に1年生に対してはスーパー農林水産業士の意義や利点などを伝える。 ・11月18日に中国四国農政局鳥取拠点との共催によりシンポジウムを開催し、県内農業者との対話を通して農業の魅力に触れることにより進路決定の一助とする。
		進学希望者への支援	・3年生で農業系大学進学を希望する生徒2名を含む進学希望者が約20名おり(2年時10月調査)、大学進学研修プログラムの参加案内や個別指導を開始している。 ・2年生で農業系大学進学を希望する生徒2名を含む進学希望者が約30名おり(2年時10月調査)、今後個別指導を行っていく。 ・1年生の4月調査は実施済。	・3年生進学希望者の進路希望が実現されている。 ・1・2年生の進学希望者に対する継続的な学習支援体制が実現されている。	・進学希望者に対する個別指導を継続させる。 ・年度初め(4月)に実施した希望調査を基に生徒の進路希望を把握し、早期に個別の指導体制を構築する。 ・進路指導部、学年団、各専門教科担当が連携を密にし学校全体で生徒の指導にあたる。	・3年生進学出願状況(10月末現在) 農業系大学(国公立大学)1名 農業系専門学校10名 その他大学2名、専門学校11名 各担任を中心に生徒一人ひとりに細かな進路指導が成され主体的な進路選択を実施している。 ・1,2年生進学希望状況(10月末現在) 1年生:農業系大学・専門学校5名、その他13名 2年生:農業系大学・専門学校14名、その他20名	C	・担任を中心に個別面談を継続し、筆記試験・面接等、各入試に向けた取組を充実させる。 ・1,2年生の進路意識はそれぞれ徐々に高まってきている。担任面談・進路LHR・校外活動に主体的にかかわることによって進路意識の向上を図る。
5	コミュニケーション能力の向上	異世代との交流推進	・学校開放講座、田んぼの学校等はコロナ禍で中止としたが、保育園、中学生との花育交流や西中学校農業体験学習、あぐりキッズスクール等は、生徒が習得した知識・技術をもとに主体的に指導できた。 ・昨年に引き続き生産物販売実習(のうこう市場、北谷販売、駅バル、学園祭生産物販売)は感染症対策を施して開催した。それぞれ多くの来客で賑わい、学校理解と地域貢献につながった。	・本校で身につけた高度な技術・知識を異世代と交流し、指導することによって自己肯定感や自信につながっている。 ・交流事業の企画、運営などを生徒が主体となって取り組むことができ、コミュニケーション能力がさらに高まっている。	・学校開放講座は、よりニーズに合った内容で実施するとともに、指導する側に立つ生徒の意識や技術を高め、主体となる学びの場を確保する。 ・目的の明確な提示、数値データ等の記録、分析する習慣をつけるなど、PDCAサイクルを意識した取組とする。	・3年ぶりに2年生インターンシップを実施した一方でコロナ禍のためにできない企業もあった。 ・スーパー農林水産業士育成カリキュラムの長期インターンシップは9名の生徒が実施した。(残り1名は冬期休業中に実施予定) ・3年ぶりに県外先進地研修(畜産部門に3名、園芸部門に1名参加)が実施できた。	B	・例年同様、学園祭、のうこう市場などの販売実習において可能な限り生産に携わった生徒も販売現場に立ち会い、消費者との対話を経験する。 ・新たに東宝企業と連携し、スーパーマーケット(小売店)における販売実習を実施する ・生徒のコミュニケーション能力育成のためにも、後期は可能な限り交流学習の開催とその実施方法を検討する。
		学校施設の開放	・地域に学校施設を開放し、本校で取り組んでいる農業教育を地域住民に体験してもらうことは、本校理解を進めるだけでなく、生徒にとって日頃の学びの意義を確認し、自己肯定につながる重要な意義を持っているが、昨年はコロナ禍のため本事業は中止した。 ・各科とも定員割れが続いている状況であり、中学校の先生方に本校の学習内容を知っていただく必要がある。	・3学科を代表する実習(乗馬教室、食品加工、木材加工、フラワーアレンジメント)に参加する地域住民の数が延50人を超えている。 ・地域に本校の学びの理解が進み、指導にあたる生徒にとって学習意義の確認や自己肯定につながり、コミュニケーション能力が向上している。 ・中学校の先生方の本校の学習内容の理解が進み、進路指導に活かされ志願者数が前年より増えている。	・地域への学校施設開放に関する情報発信を学校HPなどの媒体を使って積極的にこなす。 ・主体的に指導する生徒のスキルアップをはかるため、早期から繰り返し指導方法を練習させる。 ・中学校の先生方が出席しやすい日を設定し、参加者数を増やす。目標30名。	・新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から田んぼの学校(種まき、田植え)と学校開放講座は中止した。 ・JA鳥取中央主催のあぐりキッズスクールが本校を会場にして2回実施(乗馬体験、エリンギ植菌)され、学びの場を提供することができた。 ・中学校教員対象説明会を2年ぶりに開催し、25名の参加があった。	B	・新型コロナウイルス感染症の状況を確認しながら、拡大防止対策をとって田んぼの学校(稲刈り、餅つきの)の実施について検討する。 ・次年度に向けあぐりキッズスクールの体験カリキュラムのあり方(内容、時期)を検討する。
		生徒会活動と部活動の活性化	・生徒会活動は、執行部、農業クラブを中心に自主性が育ち始めているが、生徒会活動に無関心な生徒も見受けられる。 ・年間を通して活動している部活動が限られている。	・生徒会執行部の積極的な活動を通して、全校生徒が生徒会活動の意義を認識し、生徒会活動に積極的に参加できる。 ・中国大会と同程度の大会に出場する部が、文化系、体育系、農業クラブを合わせて4部以上となる。	・生徒会執行部、農業クラブが自主性を発揮し、生徒が主体となった生徒会行事を実施する。 ・生徒総会、農業クラブ総会、表彰式、壮行会等を充実させることにより、部活動に対する意識の高揚を図る。	・生徒会執行部、農業クラブ共に、生徒会行事に真面目に取り組み成果を挙げている。さらに自主性を伸ばす為の取り組みを継続したい。 ・部活動では日々活動を行う部が増えている。生徒の部活動に対する意識にも変化が見られる。	C	・今後の生徒会行事について、特に倉農祭については生徒会を中心に生徒の自主性を伸ばしたい。 ・後期も表彰式、壮行会を充実させ、部活動に対する意識の高揚を図りたい。

A [十分達成] 100~90 B [概ね達成] 89~70 C [変化の兆し] 69~50 D [まだ不十分] 49~30 E